

アブストラクト

本稿は経済学の中に自然の循環過程を導入する試みの一環である。対馬におけるフィールドワークに基づいておこなわれた。対馬は我が国に稲作の伝来した最初の土地として、稲作にまつわる原初的な観念が多く保存されている。「トーテミズム」の概念は、自然過程と人為を結合する思考（ムスビの原理）の象徴として登場するとともに、対馬住民が実際に取り組んでいるツシマヤマネコ保護と結合した農業形態創造の模索に、直接のつながりをもっている。農業という行為に「根付き」の根拠を与え、資本主義経済の中で固有の価値を保ち続けるためには、このような試みが必要である。

(キーワード) 赤米 ツシマヤマネコ トーテミズム 農業 対馬 ムスビ

目次

1. 序文
 2. 農業はムスビの技術である
 3. 農業からムスビの原理が消えるとき
 4. トーテミズム農業への道
-

1. 序文

地球の環境変化と一体になって全体運動している自然に直接つながっている産業を、第一次産業と呼んでいます。農業はこの一次産業の中でももっとも大きな規模をもっているもので、工業化の進んだ社会でも過剰した人口を支えるためその重要性には計り知れないものがあります。しかし今日他産業と比較するとき、その経済的劣勢は明らかであり、各国とも農業就業率の低下は歯止めが効かなくなっています。

これは農業が自然の循環過程に直接組み込まれていることに原因があります。自然の循環過程はどんな小さな場所でも環境の全体運動と結びついています。そのため貨幣化や情報化がきわめて難しくなっています。農業では土壌や水や気象などが生産の土台をなしています。いずれも価値化できない性質をもっています。そこに人間の働きかけがあって農業生産がおこなわれますが、価値化の困難な素材に対する労働として、農業者の労働は計量化するのが難しいのです。このような要因によって、これまで農業は資本主義経済に完全に適合することが難しかったわけです。資本主義は都市化を本質とします。こうして農業はしだいに衰微してきたのです。

これは人類の生存にとってきわめて危険な状態をつくりだします。このことに気づいた人々は、農業を現代に適合する産業形態に生まれ変わらせようと試みてきました。資本主義のメカニズムとの結びつきを強化することが大切だと考える人々は、農産物が流通に入る前の食材加工の過程に農業者が関与するこ

とによって、貨幣経済のもたらす利潤を農業者の側に還流させて配分のパイを大きくしようと試みています。これは農業の六次産業化と呼ばれています。これによってこれまで自然の一部分に組み込まれてきた農業者を、資本主義的起業者に変化させ、農業を他の産業に経済的にも伍していくことのできる存在に生まれ変わらせていく可能性を持っています。

しかしこのような農業の資本主義化によって見落とされがちな問題があります。資本主義は人間を自然過程から切り離し「根こぎ」する運動です。そのため農業の資本主義化が進みすぎると、この産業の本質をなす自然への「根付き」に基礎づけられた構造が破壊されかねないこととなります。『トーテミズム農業』は農業が自然環境の全体運動に「根付き」をもつ本質構造を失わずに、資本主義と共生できる有力な産業として発達していくための条件を探ろうとした試みなのです。

J A 共済総合研究所との共同研究としておこなわれた対馬での調査が、本研究のもとになっています。「トーテミズム」のような古代的な概念が、現代農業の抱える問題になにがしかの有効な示唆を含んでいることに驚きを覚える向きもあるでしょう。だが今日の対馬で始まっている、若い世代（この中には新しく対馬に移住した少なからぬ若者たちもふくまれています）による農業と漁業を核とした新しい生活創造の深層を観察してみると、『トーテミズム農業』の説こうとしている考えが、たしかな具体性を備えていることが実感されるにちがいありません。彼らは農業の資本主義化のさらに先にあるものを、探り出そうとしているからなのです。

2. 農業はムスビの技術である

現代日本の農業には、なにか根本的な部分におけるバランスが欠けている、と考えている人は少なからずいます。農業を営んでいる人々の中にさえ、自分たちのおこなっている農の営みにどこか大きな歪みが潜んでいると感じている人たちが、たくさんいます。しかしその歪みがいったいどこから発生してきているのか、それをはっきりとした論理で取り出してみるといふ試みは、まだ十分におこなわれていません。

バランスを取り戻したり、歪みを正すためには、農という営みに根本的なところ何が起こってしまっているのか、その原因が明らかにされなければなりません。私はそれを明らかにしたいと考えてきました。そのためには、農という営みの「はじまり」にまで立ち戻って、そこから現代を照らし出してみなければなりません。とりわけ日本人の農の営みの性格を決定づけてきたのは、ほかでもない米作りの技術体系です。この米作りはたんなる農業技術の体系ではなく、日本人の精神文化を育て上げ、日本列島の景観にも大きな影響を及ぼしてきました。

その農の営みの本質を、「はじまり」のときにおいて確実に理解するためには、技術をも包摂できる大きな思考の網を投げかける必要があります。それは農の営みを開始した日

本人にとっては、文化や信仰まで含んだ大きな概念をもって取り組むしかありません。そこで私はまず、日本人が米作りを始めた頃、その米作りを見守ってくれた神さまはいったいどんな神さまだったのだろうか、という問いかけからはじめることにしました。そのときまさきに私の頭に浮かんだのは対馬のことでした。

対馬は日本列島と朝鮮半島の間にあって、島の東と西を日本海流が流れており、いくつもの良港に恵まれていることなどもあって、縄文時代の早い時期から大陸と列島をつなぐ中継点となってきました。そのために、揚子江の下流域で発達した稲作の技術は、朝鮮南部に広まったあと、ほどなくして北九州に渡ってきました。そのときまさきにこの稲作技術が上陸したのが、対馬でした。対馬にはその頃の日本人が農にたいして抱いていた古い思考の型が、あまり大きな変化を受けずに今日まで伝えられています。そこで私はこの春と夏、対馬を旅しながら、農という営みの根本を考えてみようとしてきたのです。

日本列島に最初に渡ってきたのは、ジャポニカ種の「赤米」でした¹。この稲は文字通り赤い穂をして、赤い米を実らせました。野性的で荒地にもよく育つので、対馬のような土地の痩せたところでも育ちます。しか

1 稲の原種には、インディカ米とジャポニカ米の二種類がある。稲の原産地としてはアッサム（インド）から雲南（中国）にまたがる高原の大水源が、今日では最有力視されているが、主にインドで栽培されたのが細長いインディカ種であり、揚子江河口域で栽培されのちに日本列島にもたらされたのが丸みをおびたジャポニカ種である。このジャポニカ米のうちもっとも古い形質を保存しているのが赤米である。赤い穂先をもち、実を収めるにも赤い色素が含まれている。現在このジャポニカ種の赤米は、対馬と種子島と岡山のごく小さな地域でのみ栽培されている。ことに対馬の赤米栽培に付随した儀式や観念には、生産とエネルギー循環をめぐるきわめて古層の思想が表現されている。

し、なにしろ収量が少ないので、あとから入ってきた白米に押されて、稲作の伝わった日本列島の多くの土地では白米への切り替えがおこなわれて消えていきました。

ところが対馬には、この赤米を今日まで栽培し続けてきた村があります。島の最南端の^つ豆^つ酸という村では、高御魂（タカムスビ）神社に付属する神田で、神事に用いるための貴重米として、決まった家筋の者によって赤米が栽培されています。赤米の関係する神事だけでもたいへん興味深い内容を持っていますが、ここで重要なのは神事の中で赤米「ムスビ」という神さまが憑くことによって、お米そのものが神さまになる、という考えを村の人たちがいまでも抱いていることです。

赤米



(筆者撮影)

ムスビというこの神さまは、赤米といっしょに日本にやってきました。そして対馬に残っているような古い伝統では、赤米を栽培する農業技術とムスビの神をめぐる神事は、一つに結びついています。しかもこの神さまは『古事記』や『日本書紀』の中でも、最高の神の一人として位置づけられています。どうやら最初の稲作の神さま、もっと言えば日本

における最初の農業の神さまの名前は、ムスビであったことに間違いのないようです。

ムスビが登場する赤米の神事では、粘りの少ない赤米をついてこしらえたお餅が重要な役目を果たします。赤米をついたお餅は、餅米の餅のようになめらかで均質には仕上がりません。粒のままのお米の部分と糊になって繋ぎ（ツナギ）の働きをしている部分とが、不均質に入り混じっています。白米のお餅では全部を細かい粒子に砕いてしまいましたが、赤米のお餅では大きな粒同士をつなぐ糊の働きをする部分の重要性が浮かび上がっています。

このお餅に象徴されているように、ムスビとはほんらい性質の違うものを結びつける働きのことをあらわしています。同じ性質をもった均質のものをつなぐのは、ムスビとは言われません。古代人は鋭い言語感覚をもった人びとでしたから、稲作ひいては農業には、性質の違うもの同士を結びあわせる技術であり、そのためにそれを成功させるためには、性質の違うものを結びあわせる能力に優れた神さま、すなわちムスビの神の登場が必要である、と考えたのだと思われます。

じっさいこのことは現代でもすぐに観察できることですが、農業では二つの全く性質の違う活動体である「自然」と「人間の心」が「技術」によって一つに結び合わせられています。自然と人間の心とは、違う原理によって動かされています。自然は地球規模の巨大な全体性をもった循環システムとして、ゆったりとした、ときには激しい変化をともなうダイナミックな営為を続けています。ところが、人間の心は脳を活動場所にしてイメージや言語を飛び交わしながらおこなわれます

が、このイメージも言語も、自然そのものとはもともとが異質なりたちをしています。

ですから自然の営為と人間の心は、ほっておけばばらばらに分離して、それぞれが勝手な活動をはじめてしまう可能性をもっています。そこに自然と人間の心をつなぎとめ、結び合わされた状態を保つためには、その二つを結ぶ「ムスピの原理」が必要になってきます。古代の人たちは、そのムスピの原理が稲作りという農業の中にごく自然な形で働いていることに気づいて、その働きを「ムスピの神」として概念であらわし、それを表現するさまざまな儀式や祭の形をつくりだしてきました。それがしだいに発達して、農村の伝統文化を生み出してきました。日本文化の伝統の核心は、まさにこの「ムスピの原理」の深化と展開にあると言っても過言ではありません。

このムスピの神の働きを、「ボロメオの輪」であらわしてみることもできます。この不思議な図形は、三輪大社の社紋に関する伝承などにも残されているもので、はっきりした由来は明らかにされていませんが、これはムスピ神（産霊）をしめす象徴なのだろうと、私などは考えています²。

この図形は重なった三つの輪の結び（knot）によってできていますが、面白いことに、そのうちの一つの輪でも外れると、三つともがバラバラになってしまいます。じつはキリスト教が「神」の本質をあらわすのに用いているのも、父と子と精霊からなる「三位一体」をあらわすこの輪の結びにほかなりませんでした。それとは違う思考回路を通して、日本人はこの図形を使って、自分にとっていちばん重要な米作りを中心とする、生命の現象の本質を理解しようとしてきたのです³。

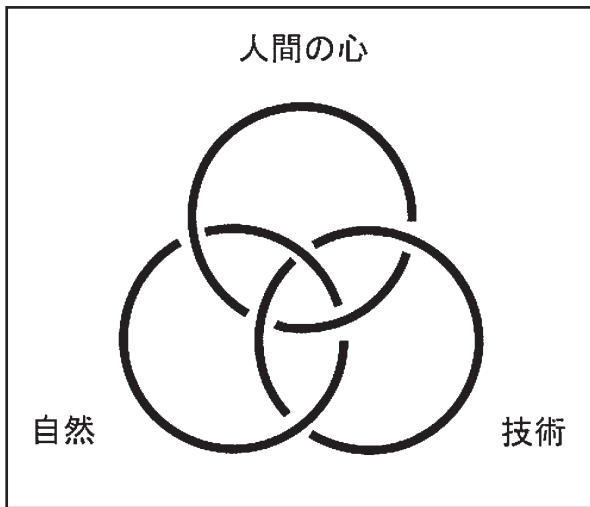
じっさいこの図形は、そのまま稲作りを中心とする（弥生時代以降の）農業の原理をあらわしています。

農業とはほんらい、このような「ムスピの技術」として発達してきたものです。そのことが農村文化の伝統では、信仰や祭をとおして表現されてきました。信仰と祭はこのムスピの体系を、象徴的な行為によって補強する働きをしています。技術だけでは人間の心とそれがつくりだす行為を自然に強く結びつけることはできません。このムスピの技術が、一つのシステムのように円滑に作動できるためには、そこに信仰と祭が強く絡み付いている必要があります。信仰や祭は、農という営みをつくるムスピの原理のサプリメント（補

2 「ムスピ」または「ムスヒ」は、記紀神話にも登場する重要な古代神である。天皇家の神話には、高天原の主宰神としてのタカミムスヒの神が登場する。この神について折口信夫は「ものを結ぶ」という意味の「ムスピ」の表現であると考えたが、「ムス（生成）+ヒ（霊）」として説明する説もある。しかし「生成霊」としても、そこには諸元素と諸力を結び合わせる「糊」や「中間子」のような働きがなければならないのだから、このムスヒとムスピは（国語学的な差異にもかかわらず）概念としては同値である。権力によって抽象化される前の「ムスピ」は、対馬の例でもわかるように、稲魂を生成する霊力としての性質と、ものごとを結びつける原理を同時にあらわしている。

3 「トリニティ（三位一体）」の構造は、人類の思考の根源にセットされている。そのためさまざまな宗教がこの構造を自然や宇宙の生成変化を説明するための原理として用いてきた。印欧語族の神話や社会は「三機能体系」をもとにしてつくり出され、古代キリスト教も神の本質をトリニティ構造で考えた。私はアジア諸族の宗教や社会の原型の中にも、人類の心＝脳に潜在するトリニティ構造のあらわれが見出されると考えている。中沢新一『三位一体モデル』（2003年、糸井事務所）を参照されたい。

農業の原理



強剤) なのです。ムスビの原理がなければ信仰も祭も意味をなしません。しかし、信仰と祭が生きていたおかげで、ムスビの原理は実感をもって、生き続けることができたのです。日本の農村文化の伝統は、まさにムスビの原理の強化のために発達をとげてきたと言えます。

その農業と農村の文化とが、いま深刻な危機にさらされています。それは農業の基礎をなすこのムスビの原理とそこから生まれたムスビの技術とが、危機にさらされていることを意味しています。その結果、いままでムスビの原理で結び合わされてきた自然の営みと人間の心と行為とが、ばらばらに分離してしまおうとしています。

TPPをはじめとする、今日農業に襲いかかっている諸問題の本質は、まずこのムスビの原理に襲いかかっている危機として考えてみなければなりません。そうしないと、こうした問題はたんに経済や商業や金融をめぐる政治問題として処理されてしまい、農業という数千年も続いてきたムスビの原理に立つ人類文化の問題として、思考されることができな

いからです。またその危機的な状況からの脱出口を見つけ出すこともできなくなってしまいます。「米作り農業はムスビの技術体系である」という命題に立つことによってはじめ、希望への出口を見つけることができるはずで

3. 農業からムスビの原理が消えるとき

農業はムスビの原理を組み込んだ技術の体系です。ムスビの原理によって、性質の違う原理で活動している作動体どうしを結合して、より大きな作動体を作り上げることができます。じじつこれまでの農業は、地球全体につながっている自然の循環サイクルに人間の心を結びつけ、自然のうちから大きな富を引き出そうとしてきました。そのさいに、人間は全体性をもった自然の循環サイクルにたいしては、なかば受け身の立場をとるようにしてきました。いわば「自然が自分の思いどおりに活動する」状態を保ちつつ、そこに技術を介して人間の行為を注ぎ込むというやり方をとってきました。その意味では、ムスビの原理の中には、自然の側からの声に耳を傾けるといいますか、挑発を避けて受動的な態度で相手に接する、という自然への対応の仕方が含まれています。

これは異質なもの同士をムスブための技術すべてに共通する重要な性質です。ムスビの原理が結ぼうとしているのが異質なもの同士であり、異質性が保たれているからこそ、その結合から豊かなものが生み出されるのであれば、ムスビの技術そのものである農業は、半ば受動的で半ば能動的な態度で、自然に向かっていくこととなります。そこから農民に

独特な心性が育っていくことになりました。

農民はよく迷信深いなどと言われましたが、それは彼らが深い奥行きをもった自然との間にムスビの関係を発生させるための、さまざまな技術や象徴の道具を用いてきたからだろうと思います。異質な作動体どうしを結ぶためには、思考は矛盾や飛躍を許さなければなりません。そうすればどうしても非合理や神秘を抱え込むことになるでしょう。近代人はそういう心性を否定したいと考えてきました。世界が性質の異なる作動体をムスビの原理によってつなぎあわせた凸凹な接続体であるような状態を、近代人は否定したかったからです。近代人が心底で否定したかったのは、それまでの世界をつくってきたムスビの原理そのものであったのかも知れません。

＊ ＊

農業からムスビの原理が消失していくことによって、どんな効果もたらされたのでしょうか。まずムスビの原理に堅固な構造を与えてきた信仰的な文化が、弱まっていきます。ムスビの神に実在感を与え、そうすることでムスビの原理そのものを強く意識させていた祭や儀式が廃れてきます。そうすると、自然の営みと人間の心と技術を結合していた「三ツ輪」の構造がゆるみはじめ、自然（ここには土地や作物や環境などの複雑な要素が含まれています）と人間の心が、ばらばらに分離してしまいます。そうなるといままで自然と人間を結んでいた技術の中身が変化を起きます。

伝統的な農業技術の体系の中では、技術は異質なものをつなぎあわせる働きを果たして

きましたが、それが内部から変質を起し、異質性を消し去ってすべてを均質なものにつくりかえてしまう技術が発達するようになります。いままでは、自然の側の求めに応じて、人間の行為は変化してきました。ところがいまや、土地や動物や植物のほうを人間の計画や都合に合わせてつくりかえる、均質化の技術が主流になってきました。

違うものを結び合わせる技術の中では、人間はいつも自然との妥協を強いられます。早い話が、人間の思いどおりにはならないのです。ところが新しい技術の世界では、自然の側を人間の計画に従属させることによって、いままで以上の収益を自然から引き出すことがおこなわれます。それが可能になるためには、農業の基礎的な部分に組み込まれているムスビの原理の力を弱めておかなければならないでしょう。世界中のものが、自然のものであれ人間のものであれ、均質（ホモジニアス）につくりかえられていくとき、まっさきに取り除かれたのがムスビの原理とそれが生み出す技術の体系でした。

たとえば、収益を上げるために大量に組織的に農薬を散布している農業では、気づかないうちにムスビの原理が否定されています。昆虫や微生物は自分たちが生きるための活動をおこなっているのですが、それはしばしば人間の側の利益には反することがあります。農業がムスビの原理によって生きていた世界では、人間の欲求と生物の欲求の間に適切な調停点を探る努力がおこなわれました。昆虫や微生物を害虫として根絶して、畑や田に生きるすべてのものを人間の計画や思惑に従わせようとはけっしてしませんでした。そこか

ら世界にも誇れる里山の景観が生み出されました。

しかし今日の農業では、高性能に進化をとげた農薬を組織的計画的に散布することによって、広い範囲にわたって虫も微生物も生存できないような環境をつくりだそうとしています。さらに除草剤も手を貸して、雑草を残らず涸らしていきます。草が生えなければ虫も生きられず、ウイルスや細菌でさえ生存が許されない土地で、ただ遺伝子操作された種子から成長をとげた換金作物だけが生育できるのです。このような農業には、ムスビの原理はいっさい働いていません。

農業からムスビの原理が失われると、そこには商業や工業や金融をなりたたせているのとまったく同じ原理が浸透して、人類が長いこと「農業」と呼んできたものとはまるで別物の、新しいタイプの企業化された農業が登場してくることになります。異質なもの同士を結合するムスビの原理によって自然に働きかける農業ではなく、貨幣の原理によって支えられた農業です。それがどういう世界をつくりだすかは、いまからでも十分に予想できます。

高い収益をあげるために、たえず土地や作物に無理強いすることになりますから、当然長い間には地力は失われていきますし、長期間農薬と除草剤の散布を続けた環境からは、作物以外の生物が消えていくことになります。生物多様性の危機を、生物を育てる農業じしんが進めることになります。そしてこの変化は、そこに住む人間の心にも大きな変化をつくりだします。人間の心というものをつくってきた（心的装置を結びつける）ムスビ

の構造がばらばらに緩んできます。そうすると、ムスビの原理を失った心は、貨幣や情報のように均質でふくらみのないものでできた平板な構造に支配されるようになるでしょう。

それでは現代の農業に、もういちどムスビの原理を取り戻すことなどは不可能なのでしょうか。これまでの農業では、自然の営みと人間の心と技術とが、ばらばらに分離しないような三つの輪として、しっかりと結び合っていました。そしてその結び目の部分には、祭や信仰をとおして表現される象徴装置がからみついて、堅固な構造をつくりだしていました。この三つの輪が、結びの原理を破壊する貨幣の力によって、ばらばらに分離されようとしています。

いなくなってしまったムスビの神を、呼び戻すことなどはできません。現代の私たちは、神さまに頼るのではなく、別のやり方でムスビの原理を農業に取り戻すしかありません。自然（土地、動植物、景観etc.）との間にムスビの関係をふたたびつくりだすことのできるための科学的な方法、それを私たちは「野生の科学」と名づけてきましたが、その野生の科学の方法によって、人間の心を形成してきた原理でもあるムスビの原理を、現代の農業の中によみがえらせてみたいのです。

4. トーテミズム農業への道

私はそのような来るべき農業を、「トーテミズム農業」と名づけようと思います。この一見すると奇妙な命名には、深い由来があります。

トーテミズムは今の人類が出現するのとほとんど同時期にあらわれた、人類の最古の社

会と自然の関係をめぐる思想です。オーストラリア先住民のものが有名ですが、かつてはすべての人類社会がトーテミズムを実践していました。それは、動植物や鉱物や気象などの自然の存在と人間との間に内面の深い絆を見出して、その絆の感情や分類を基礎にして社会をつくりあげる制度です。一人の人間が、個人のレベルで、性の違いによって、社会集団への帰属によって、人生の重要な時期に見た夢によって、特定の動植物や自然存在ときわめて密接なつながりをもつように選ばれ、その結びつきはその人の一生続きます。その結果、私はカンガルーと特別なつながりを持つ、とか私はヤマイモの存在に親族に対するのと同じ責任を持つ、などという考え方が発生することになります。つまり、トーテミズムはムスビの原理のもっとも古い現れをしめしていると言えます。

トーテミズムが発達した社会では、それぞれの人間やその集団が、自分の生活している自然生態の健全な営みの持続にたいして、強い責任を感じながら暮らしています。特定の生物種との間にはムスビの原理によって形成された強い共感（シンパシー）ができあがっており、その生物種の繁栄や安心を実現するために、人間は心を注ぐのです。他の集団は別の動物種や自然存在に絆と責任を感じていて、同じような配慮を注いでいますから、トーテミズムを実践する社会が全体として、生態系の健全な運行に思いを注ぎ続けることになります。

このようなトーテミズムを新しいムスビの原理として、現代によみがえらせることには、大きな可能性があります。古いムスビの

原理は、米作りと結びついた宗教の形態をとっていました。そこではムスビの神が、自然一人間一技術の「三ツ輪」を強く結び合わせる補強材の働きをしていました。ところがトーテミズムは宗教ではなく、一種の「野生の科学」としての特徴を備えています。もちろんそこでもムスビの力にたいする「科学を越えたもの」への直感が働いています。しかしその直感は宗教の形態をとる必要がありません。じっさいにトーテミズムが生きた思想として活動をおこなっているオーストラリア先住民の間でも、トーテミズムは宗教ではなく、人智を越えた力の働きにたいする直感の体系の形をとっています。

むしろトーテミズムは、ムスビの原理を基礎とした、生命世界にたいする別種の科学と考えることができます。現代の科学的エコロジーでは、ムスビの原理を表面に出してくることは慎まれているのですが、フィールドである森や田園で研究している科学者が、たえず科学を越えたものの感覚を体験している様子がかがえます。この科学を越えたものを、現代の科学が認めている論理で表現することは難しいのですが、自然に深く踏み込めば踏み込むほど、その「なにものか」の感覚にさらされていくことになります。私はそれが自然界に潜むムスビの原理に関わりがあると考えています。トーテミズムはこのムスビの原理に直接なつながりをもった社会と思考のシステムです。ですから、宗教に依ることなくムスビの原理の実現を語るためには、トーテミズムは絶好のモデルを提供してくれるのです。

**

私は日本列島における米作り農業の起源を探るために、対馬に渡りました。そこで最初の米作りの神であるムスビの神をめぐる、さまざまな信仰と祭と出会うことになりました。その旅の途中に、まったく偶然に、トータリズム農業の先駆形態とでも呼ぶべきものに、私は出会ったのでした。その驚きがいかにばかり大きなものであったか。その報告を聞いてください。

対馬の北部にある上^{かみあがた}県^{さこ}町の佐護は、朝鮮海峡に向かって開かれた深い入江につくられた村です。南部の豆酏と同じくらいに古い来歴を持っています。興味深いことに、この村にも古いムスビの神を祀る神社（天神^{てんじん}多久^{たくぶ}頭^づ魂^{たま}神社）があり、豆酏のムスビ神と対をなしていると言われてきました。おそらくは古い時代にはこの村にも赤米をめぐる儀礼がおこなわれていたと思われませんが、今は絶えておこなわれません。

そのかわり、現代の佐護はムスビの神ならぬツシマヤマネコの生息によって、有名になっています。かつて対馬の全島に生息していたツシマヤマネコは、開発が進むとともにしだいに北部の山がちな森の中へ隠れ住むようになりました。そのヤマネコが科学者によって絶滅の危機に瀕していることを知らされるまで、多くの島民はこのヤマネコの存在にすら気づかなかったそうです。しかし農民たちは、刈り取りの季節などが近づいた頃、自分たちの田んぼにどう見てもふつうの猫ではない猫が出没していることを知って、その猫たちを「田ネコ」と呼んで家ネコや野良ネコと

区別していました。

このヤマネコが全島にもはや百頭も生息していないらしいと知った対馬の人びとの中から、ツシマヤマネコの保護運動に乗り出す人びとが出てきました。なかでもNPO法人「ツシマヤマネコを守る会」を創設した山村辰美さんの活動は目を見張るものでした。ナショナルトラストの援助を受けて、彼はヤマネコの生息する佐護の裏山を数千ヘクタール買い取って、そこをヤマネコのアジールとして守ることにしたのです⁴。

山村さんたちはそこにツシマヤマネコのための餌場をつくりました。そこは、もとは人が入り、畑が開かれていた山でした。その頃ヤマネコはそこに住むカヤネズミやヒメネズミを捕食していましたが、山中の畑は放棄され、ヤマネコの食料はどんどん少なくなってきました。ツシマヤマネコ激滅の原因はここにあったのです。人がいなくなり、土地と作物とそこで育つ小動物の激滅がヤマネコにダイレクトな影響を及ぼし、気がついた時にはそこにいた声もない動物たちや、風景が失われていったのです。そこで山村さんたちは山の中に住むツシマヤマネコの生存を護るために、定期的な餌やりをはじめました。目の前にいて、苦しんでいるヤマネコのために、今自分がなにかしたい、自分が気づかないうちに触れてきた環境に恩返しをしたい、山村さんはその一心だったといいます。また、給餌と並行して、山の中に水飲み場をつくり、放棄されている山の中の畑にソバを育てていきました。その名も「動物たちの園」。実った

4 「NPO法人ツシマヤマネコを守る会」ウェブサイト <http://tsushimayamaneko.org/>

穀物、ソバや大豆などは収穫せず、そのまま小動物の餌に残しています。このため畑ではネズミ、キジバトなど多くの野鳥も見られます。それをえさとして、ヤマネコも生きやすい環境をつくってきたのです。

いっぽうツシマヤマネコが絶滅の危機に瀕している報に接した農民の中にも、変化が生まれました。米作り農家の春日亀隆義さんは、子供の頃から田んぼでときどき見かけていたあの田ネコが、それほどに貴重な生物であっ

この谷の全域がツシマヤマネコ・トラストとして保護区になっている



山村辰美さんと給餌場の様子



「動物たちの園」 そばの種まき



ツシマヤマネコ 耳の後ろの白斑と太い尾が特徴



湧水を利用した水飲場



(各写真はいずれも筆者撮影)

たことに驚くとともに、自分が今おこなっている米作りのやり方に、深い反省を抱くようになったのだそうです。今の田んぼには野ネズミの巣を見かけることも難しくなり、ヤマネコが食物を探すことのできる環境がどんどん少なくなっています。自分たちのやっている農業そのものがツシマヤマネコを追いつめ

春日亀隆義さん



ツシマヤマネコ米のパッケージデザインにも力を入れている



(各写真はいずれも筆者撮影)

てしまったのではないか。その気持ちから春日亀さんは、一念発起して、新しい農業への転換を決心したと言います⁵。

使用する農薬の量をまず半分に減らし、肥料も半分まで減らしました。はじめは理解してくれる人もいませんでしたし、じっさいに笑うひともありました。それでも、だんだん

ツシマヤマネコ米認定田



ツシマヤマネコ米の認定田が一面に広がる



5 「佐護ヤマネコ稲作研究会」ウェブサイト <http://yamanekomai.jp/>

と若い人たちの中に理解者があらわれるようになりました。半農半漁の農村では高齢者がだんだんと自分で耕作ができなくなり、春日亀さんたちのグループに耕作を依頼するようになりました。また、今ではそのような人たちからも「農薬ふっていいかー、ふらんでもええやろか」と相談を受けるまでになっています。こうして佐護にある70ヘクタールの田んぼの内、30ヘクタール弱で減農薬減肥料による耕作が実現していったのです。これらは、「ツシマヤマネコ米」を栽培する田んぼとしての認定を受けるようになりました。わずか数年の間になしとげたこととしては、これはたいへんな成果です。そして春日亀さんは、なにより自分は百姓だということに大変な誇りをもつようになったといいます。自分は百姓だ、土地を耕し、穀物をつくるのが仕事だ。環境を考え、ヤマネコのことを思い、さらに、おいしい米をつくりたいと願う。それを思うとき、「ああ、もう一度農薬をふりたい」という考えがわいてきてもぐっと耐えるのだ、と。おいしい米と豊かな土地、それを若い人たちに手渡したいと春日亀さんは考えています。

こうして佐護の村を全体として見てみるとときには、そこに私たちの考える「トーテミズム農業」の先駆形態が実現されていることがわかります。ツシマヤマネコのような動物は、いわば対馬の生態系の頂点に立っていると言えます。生態系の頂点に立つ動物は、しかし生態系のバランスが崩れていくとき、まっさきに絶滅の危機に直面することになります。そのツシマヤマネコが生息できる環境を取り戻していくことができれば、

佐護の村の、いや対馬全体の生態系にバランスが回復されつつあるということができません。開発と農業がもたらしたムスビの原理の消滅という事態から、この村はしだいに立ち直りつつあるように見えます。

この島に生きる多くの人たちが、ツシマヤマネコの生存状況を心配しています。その心配はこの動物にたいする共感にまで深まっていこうとしています。そしてその中から先駆的な活動に乗り出す人びとが現れています。島の人たちはそのことをまだ意識していませんが、私にはこれこそが来るべきトーテミズム農業の先駆けであると思えるのです。

＊ ＊

対馬における取り組みは、そのうち孤立したものではなくなるでしょう。他の地域でも、同じようなトーテミズム農業の取り組みが可能だからです。ツシマヤマネコのような生態系の頂点に立つ立派な生き物でなくてもいいのです。どの地域にも自分たちの生活圏を象徴するような動植物がいます。赤とんぼや蛙のような平凡な（失礼！）生き物でもいいのです。それらを自分たちの地域の生態を代表する生き物として選び出し、それらの生物が生きやすい環境を回復するために、農業のやり方を変えていくとき、そこにはいったん姿を消したムスビの原理が、ふたたびよみがえることができるようになります。そこには環境のエコロジー、社会のエコロジー、心のエコロジーの三つが、たしかな結びつきを取り戻すことになるでしょう。

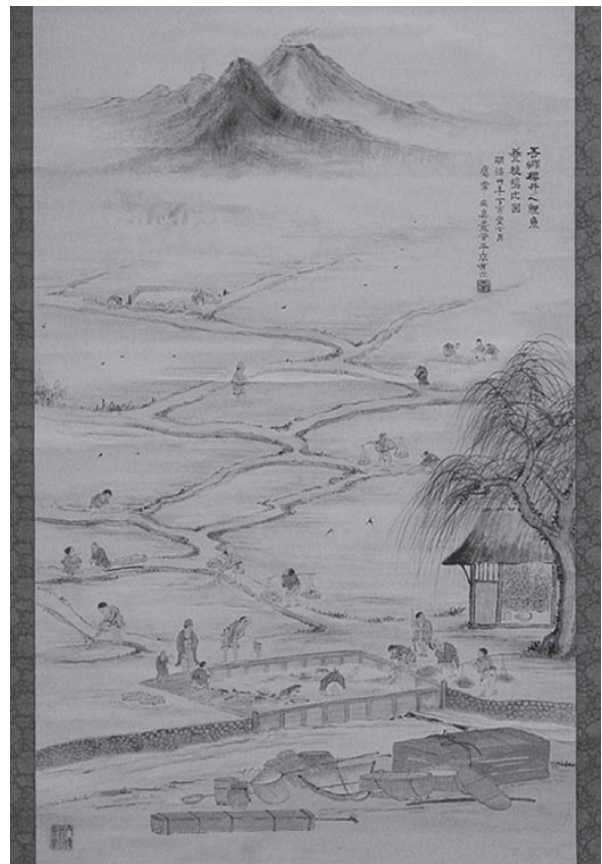
トーテミズム農業は「里山」の思想の奥にひそんでいる根源の考えをとりだしたもので

す。稲作をおこなう日本人の先祖は、もともと海を活動の場とした海民だったことが知られています。海民は船を操るのが巧みで、その技術を使って海で漁をおこなったのです。この人々の中から、稲作をおこなう人々が出てきました。田も耕せば、漁業もやるというのが、日本列島に住みついた農民の生活形態でした。

このとき水田というものが出現しましたが、それにもっとも感銘を受けていたものたちが、人間以外にもいました。淡水を生活場とする魚や爬虫類や昆虫などの水中生物たちです。彼らは水田が出現するとすぐさま、そこが自分たちにとっての最高の食事場所と産卵場所であることを発見しましたので、水田につながる川や湖から水路をつたって、田んぼに住みつくようになりました。それを知った人間は、農業をするかたわら、水田や川や湖での漁業にも腕を磨くようになりました。琵琶湖の周辺や信州佐久の美しい里山に展開する「水田漁法」などはその代表例ですが、そこでは鮰や鯉を象徴動物とするエコロジーの三つの輪ががっちり結合しながら、農の営みを包み込んでいます⁶。

そんなわけでトーテミズム農業の考えは、日本人の自然観の根底にある思想に自然と結びついていける、少しも無理のない考えだと言えます。トーテミズム農業は、現代にふさわしい形をしたムスピの原理をよみがえらせる力を秘めています。そしてよみがえったムスピの原理にしたがって作られる農産物にはほんらいの豊かさが戻り、高い商品価値さえ

稲田養鯉の図（佐久）



（出典）柳沢昇一氏所蔵

与えられることになるはずですが。ただブランド米をつくれればよいというわけではありません。トーテミズム農業はブランドともなりうる米や野菜をつくることをとおして、日本人の心のあり方に大きな変化をつくりだすことができるかも知れません。

それをおして農という営みには、かつて自然との間に実現されていたバランスのとれた状態が取り戻されていくはずであり、農の営みに喜びが戻ってくるでしょう。トーテミズム農業は、現代農業に残されている数少ないが強力な可能性のひとつを体現しているのではないのでしょうか。

6 水田と水辺を産卵や生活の場とする生物の密接な関係が、里山としての日本の景観をかたちづくってきた。里山とトーテミズム農業は、原理的に深くつながりあっている。